セルリオの建築書第4書におけるパラッツォの
ファサードの構成法についてON THE METHOD OF COMPOSING FAÇADE OF PALAZZO IN
SERLIO'S FOURTH BOOK ON ARCHITECTURE

石川 康介*

Yasusuke ISHIKAWA

The construction of "palazzo" became popular in the period of Renaissance and its façade became new design theme for the architects. Serlio dealt with palazzo in his Fourth Book and Sixth Book as the other contemporary architects did in their books on architecture. This paper examines the method of composing façade of palazzo in Serlio's Fourth Book on architecture and clarifies the characteristics of his method.

The results of the analysis in this paper are as follows;

- 1) The method of constructing a porta is applied for composing the whole façade of palazzo, and is used especially to divide the width of the façade for making width of pillars.
- 2) The geometrical scheme of "matrix" which derived from the method of constructing a porta is possible to be used also in the rectangle for designing the façade.
- 3) Some differences between the rules of order and geometrical scheme method are adjusted to get the totality of façade design.

Keywords : Serlio, palazzo, geometrical scheme, façade design

序

ラテン語の palatium から派生した PALAZZO パラッツォは宮殿、邸宅、庁舎などを意味するが、建築史的にはルネサンス期の権力者、新しく台頭してきた富豪の住居、記念性を持った庁舎などの建築を指している¹⁾。中世的な城郭の性格から抜け出した都市の住宅建築は、教会建設に加えて世俗的な建築として当時の新しい建築のジャンルとなり、それらは1400年代におけるフィレンツェのパラッツォ建築（その代表的なものはパラッツォ・メディチである²⁾）以来、建築家にとっての関心事であり彼等の設計の重要なテーマとなった。ルネサンス期に著わされた建築書にも、それらは取り扱われ、パッラーディオが「建築4書」の第2書において都市住宅として自ら設計した設計例を平面図、立面図などにより載せているのはよく知られている³⁾。セルリオも「あらゆる階層の人々の家、邸宅を取り扱った」住宅に関する建築書第6書を書き残し、その中でパラッツォを扱っている⁴⁾。また彼の出版の原点となる第4書においても、オーダーを扱った各章において、そのオーダーを持つ作品例としてパラッツォを載せているが、それらは後に出版さ

れた建築書第6書における住宅設計の規範、指針を与えた作品であると考えられる。

本論では第4書におけるパラッツォのファサードの構成法について分析を行なう。そしてその分析のために前稿において取り上げた「ボルタの確定法」を用いる⁵⁾。既にそこでこの方法は、単なる出入り口の設計法に留まらないボルタ総体を構成するための方法であることを示したが、ここでは主として比例論的な観点より、パラッツォのファサードの構成法における「ボルタの確定法」の図式の役割について述べ、セルリオの説明の意味を考察しつつ、あるいは建築書に述べられていない彼の理論的背景を探りながら、ファサードの仕組みを考察することとする。これまでの比例論的研究において、パラッツォのファサードを扱ったものは幾つかあるが⁶⁾、セルリオのパラッツォのファサードに関して、「ボルタの確定法」の図式と関連付けて論じたものは見当たらない⁷⁾。

さて第4書におけるパラッツォを表わす図版にはファサード全体を一まとまりに表わしているもの、第1層から最上層までを示しているが、間口方向に2、3スパンのみを表し、言わば同じモチーフを連続させるファ

* 近畿大学 講師・工修

Lecturer of Kinki Univ.

サード全体の一部分を描いたものがある（それらの中で最も知られているものはパッラーディオによるヴィチェンツァのバジリカのデザインの源泉となったモチーフを表した図版である）⁸⁾。ファサード全体を表現した図版には第6章における XXXIIIr, XXXVr, XXXVIr, 第7章における XLVr, 第8章における LVIr の5例がある。ここでは先ずこれらの中から「第6章ドリス式オーダーとその装飾について」における3例より2例図版 XXXVr, XXXVIr を取り上げた。ここで省いた同じ第6章の図版は、柱間が3スパンのファサードであり、セルリオはこれについて5スパンにも7スパンにも延長して使うことができると書いているので、ここでは部分的なものとして捉えることとし、その分析は別稿に譲る⁹⁾。

(1) ドリス式パラッツォ（その1）、図版 XXXVr¹⁰⁾

このファサード（図-1）はセルリオの建築書の中でも最もよく知られた図版の一つで、断片的な図版の多い第4書の全図版の中でも完成され、安定した構成を持つファサードデザインであり、ルネサンス期の理想的なヴェネツィア風のパラッツォの一つとして、これまで多くの刊行本、研究書にも取り上げられ、引用されているファサードである。同時代のルネサンス建築家の中で、理論家としてよりむしろ実践的な建築家として優れた作

Q V A R T O . XXXV.

図-1

1537年初版建築書第4書マイクロフィルム版より、補助線は筆者記入

品を残した G.B. ヴィニョーラも、初期の建築作品において直接的にこのファサードから影響を受けたと見られる作品（1545）のプロジェクトを残している¹¹⁾。セルリオの建築書におけるファサードのデザインが当時のヴェネツィアの建築に与えた影響は大きいと言われているが¹²⁾、このパラッツォもその一つであろう。この「作品」は実際にはそのまま建てられなかったものの、ルネサンス建築史上最も有名なファサードデザインのの一つと言えるだろう。

この建物は図版から明らかなようにヴェネツィアの運河に面して建てることを想定しており、ファサードの足元、土台のところには水面も描かれている。全体は3層構成で、第3層目の上、中央部には破風を持つアティックがある。第1層はルスティカ仕上げの壁であり、ヴェネツィア独特のやり方で、運河から直接出入りできるように、ルスティカのアーチを持つ玄関が中央に設けられている。第2、3層はドリス式柱が配列され、開放的な窓構成であり、運河に面した側に3部屋並ぶことが、説明文の下に載せられた部分的な2階平面図から知ることができる。これはヴェネツィア特有の「三分割構成」あるいは「三列構成」と呼ばれる住居プランから来たもので、セルリオもその伝統を引き継ぎ、更に新しい時代にふさわしいパラッツォのファサードを創造したと言われるが¹³⁾、この作品はその代表的な建物であろう。

第4書におけるパラッツォの解説は見開き2頁で左頁に説明文と平面図の一部、右全頁に図版を載せるのが、原則となっている。ここで少し長くなるがセルリオの記述法を知る意味でも、このファサードの割り付けについての説明文を訳出すると、次のとおりである¹⁴⁾。

「以下のファサードを飾るために、その幅を24部分に分割する¹⁵⁾、それらの一つは柱となり、中央部の柱間は柱6本の幅となる。他の間はそれぞれ3柱分となる。窓の幅は柱一本分と半分、その高さは二重正方形と半分¹⁶⁾窓枠はその開口の1/6、第1層の窓は同じ幅で、それらのうち地上階部屋のための下の窓は正方形であるが、中二階と呼ばれる部屋の上段の窓は正方形と半分である。出入り口は幅が5柱径であり、柱は頑丈な基礎を持つので、その高さは正方形と2/3となる。楔石、他の石の繋ぎ方は図に見ることができ、測ることができるだろう。出入り口のアーチの下端から第1層の帯状部の上端までは柱径の二倍である。或る層の上にある他の層は総て高さにおいて1/4減らすのが望ましい、しかし私の考えでは、この場合基礎部¹⁷⁾の上にある柱から割り付けが始まっているので、そこは第1層と同じ高さとするのが望まれる。何故ならもしルスティカが、中間のドリスより1/4大きいとすると、第3層は第2より小さいので、この第3層が減少されすぎ、第1層が高すぎることに成るからである。さて第1層を帯状部とともに作り、次に

パラペットと呼ばれる柱台¹⁸⁾を柱1本と半分の高さで作
り、その上に上述のオーダーにより柱が配される。そ
れらの高さは第2層が第1と同じ高さなので、柱台を除
き残りを5部分に分けその内の4が柱となり、他はアー
キトレーズ、フリーズ、コーニスになる。つまりこれら
の部分も最初の規則に従うことにより、図面にあるよう
に分割され、同様に柱も正しい比例となるであろう。中
央の柱間は、小さい柱が大きい方の半分となり、真中の
空き幅が両脇の二倍となるよう分割される。両脇の空き
の高さは他の窓と同じレベルであり、それらの窓の上
に、大きな明かりとして図に見られるようなオッキオを
設ける。そして中央の小さい方の二つの柱間の上にも、
作品に見られる様なものを作るなら、あるいはそのレ
ベルで同様のオッキオをもっと大きく付けるなら、ま
た他の細かい部材が残っているなら、いつでも最初の規
則に戻らねばならない。第3層は第2より1/4縮小され
る、つまり総ての部材が対応した割合によってである¹⁹⁾。
しかし総て窓は下のそれらの幅と等しくする、同様にそ
の高さ、他の部材はコンパスにより詳しく見付けだすこ
とができる。中央の破風を載いた立ち上がり部分は、破
風を除いて第3層の高さの半分となる。各部材の残った
部分については既に言ったように、いつも優れた建築家
は自らの自由意志により整え、増やしたり、減らしたり
できるだろう。このファサードはヴェネツィアの慣習に
よって作られている。」

以上の解説から読み取れるファサードの「幅」と「高
さ」についてその割り付け方法を検討しよう。先ず幅に
関しては次の2点が重要な基本事項として指摘できる。

(1) 割り付けの基本単位としての柱径(平面図から見
ると円柱ではないので柱幅であるが、一般的な単位
として捉えて、「径」とした)は、全体幅を24分割
することで与えられる。

(2) 中央の柱間(いわゆるセルリアーナのある柱間)
は6柱径、その他の柱間は3柱径とする。

この割り付けについてセルリオは先ず「以下のファ
サードを飾るために、その幅を24部分に分割する、そ
れらの一つは柱となり、中央部の柱間は柱6本の幅とな
る。他の間はそれぞれ3柱分となる。」と書いているよ
うに、始めに全体の幅の24分割を行なうと同時に、中
央部の柱間=柱6本分すなわち全体の4分割を行ない、
しかもその1/4はファサードの中央に置かれることを要
求している。この割り付けは無論、柱が配列される第2
層目における事柄である。

ここでその割り付けが、図式的にどのように行い得る
かを見てみることにする。その手掛かりとして前稿の「ポ
ルタの確定法」から導出された「マトリクス図」を今一
度確認し(図-2)²⁰⁾、その援用を試みる。この図は任意
の正方形に「ポルタの確定法」を描き、そこに作図され

「ポルタの確定法」の展開

図-2

る元の正方形の辺長の1/2, 1/3を一辺とする正方形に、
それぞれ「ポルタの確定法」を繰り返し描くことによ
って得られる図であり、種々の分割を行い得るセルリオ独
自の方法であると規定された。この図式のファサードへ
の適用としては、図1のように先ずファサード第2層目
での両端の柱の外端間の距離を一辺とする正方形を第2
層の上に描く。次にその正方形において「マトリクス図」
通りに作図を行うと、元の正方形の1/4の正方形が、元
の正方形の底辺上つまり第2層の基線上に描かれる。こ
の操作により中央部の柱6本分の柱間=全体の1/4幅の
間隔は、セルリオの記述通りに任意の幅の中央に必要と
される位置に納まり、求める長さの幅を最も効率よく確
定することができる。そしてこの時、作図の過程で描か
れる正方形の辺長を3分割する縦線と、4分割された正
方形を形成する縦線はファサード中央セルリアーナの両

脇2本の柱の径を確定する。つまり最初に描いた正方形を「マトリクス図」に従い3分割、4分割する図式がそのままファサードの割り付けに使用可能であると考えられる。またその柱径は計算上

$$1/2\{(1/3)-(1/2)^2\}=1/24$$

で求められ、全体幅を24分割したものの一つであることが確かめられる。さらに作図における線の交点によって他の柱の位置も確定されていくことにより、第2層全体の基本的構成が決定されていく。

このファサード割り付けにおいて、「マトリクス図」による作図法を用いたという直接的な説明は、セルリオの記述の中には全くないが、彼の記述する内容を図式的に捉え、作図する観点から見ると、いまここで述べた方法によって最も効率良く描き得ることは事実である。そして彼自身殆ど解説しなかった「ポルタの確定法」から「マトリクス図」への展開を理解し、それがセルリオ独自の分割方法であることが明らかとなったことを考え併せるなら、このファサードの幅の割り付けにおいて、「マトリクス図」が適用されたことは、ほぼ確実なことと考えてよいだろう。つまりこの場合「マトリクス図」は、ファサードの幅を分割すると同時に柱径とそれぞれ柱の位置、即ち柱の配列というファサードにおける重要な構成要素を確定する図式である。この意味でそれはセルリオの設計法と言うべきかも知れないが、ここでは「マトリクス図」を単なる分割のための作図法に限定すべきでないことだけを指摘するに止める。

次に高さ関係の基本的構成は以下のとおりである。

- (1) 第1層、第2層は同じ高さである。
- (2) 第3層は第2層より1/4低い。
- (3) アティック部分は第3層の1/2である。

第1層目と第2層目の高さを等しくすることは、言い換えるなら、例えば作図上第1層目と第2層目とを加えた高さを一辺とする正方形を上下に2分割することにより各層の高さを決定することでもある。このファサードの説明においてセルリオは第1、第2層の高さを11とすることを記述していないがこのファサードの図版においては、24分割されたファサードの幅から両端の柱幅を取り除き幅22とした正方形を描き対角線を引くと、その交点は正に第1層、第2層の境界線上に位置し、それらの高さは11になることが明らかになってくる。このことは図版そのものからも読み取れることであって、偶然なことではない。また図版の正確さは、例えば次のことから確認できる。つまりセルリオが書いているように²¹⁾、コンパスなどを用いて図版上で測ると多くの数的関係が正しく捉えられるが、第3層の高さは正確に第2層の高さの3/4となっていること、また例えば第3層上に第2層の高さを持つ長方形（または正方形）を描き、対角線による分割を2回行なうことにより確定される

3/4の位置が、この図版上正確に第3層の高さとなることなどである。

ここでルスティカ仕上げの第1層とドリス式柱の並ぶ第2層の高さが等しいことについて考察してみよう。セルリオの記述に従うと第1層のアーチは幅が5柱径、高さは「正方形と2/3」であり、アーチ下端から第1層の上端までを2柱径としているので、第1層の高さを計算すると

$$(5+5\times 2/3)+2=10\frac{1}{3}$$

である。他方、第2層については柱台を1 $\frac{1}{2}$ 柱径として、残りを5分割し、4を柱に充て、1をアーキトレーズ、フリーズ、コーニスに充てている。セルリオの言う「最初の規則」²²⁾によるとドリス式柱の高さは柱礎、柱頭を含んで7柱径であるからその高さは計算より

$$1\frac{1}{2}+7+7\times 1/4=10\frac{1}{4}$$

となる。上で見たように第1層、第2層の高さは図版では等しく11柱径に描かれてはいるものの、これらの二つの計算結果によると、それらは等しくはなく無論11柱径でもない。セルリオの解説の中に矛盾があり、記述と図版とのあいだにも差がある。このことは彼がある程度古代の規範に従う一般的理論としてのオーダーに与えた数値と、彼自身の創作であるファサードの割り付けのために与える数値とのあいだのある関係を示すものだろう。つまりオーダーについては、第4書の冒頭で5つのオーダーを揃え、各章の始めにウィトルウィウスの建築書、古代の作品などを引き合いに出しつつ細かな数値を与えているが、それらを実際のファサードの設計に用いる時に、何らかの調整が必要とされることは予想されることである。そこにオーダー理論と制作実践とのあいだの数的矛盾が現われていると考えられる。予測される最終的に生ずるズレ、矛盾を認識しつつもセルリオはウィトルウィウスの建築書、及びそれに倣った当時の建築理論書²³⁾の細かいオーダー理論を参考とした数値を提示しながら、彼の建築書に自らの作品を描いた。その設計においては全体の整合性のため、出来るだけズレを少なくする概略的な数値を与え、単純な整数比となるよう整えたと考えられる。そして全体をまとめる数値は、オーダー理論によって組み立てられる構成からそれほど離れない程度に、図式に基づいて決められているようである。（無論実際に建設される場合には、もっと複雑な関係が生ずることはいうまでもない。）つまり彼の建築書におけるパラッツォのファサードの基本的枠組みは、何らかの図式を採用することにより確定されたと考えられる。そのため適用された図式は、このファサードの場合「ポルタの確定法」から導き出された「マトリクス図」であると考えるのが自然であるだろう。具体的にはこの場合、図版上では第1、2層の高さを11柱径とすることで、オーダー理論と記述上の数値による計算上のズレを図式的に

簡単な整数により均していると思われる。高さの関係を割り付けることを主体とするオーダー理論の性格上、幅の割り付けにおいてよりも、高さ関係において数的な差が多く生ずると思われるが、勿論ファサードにおける高さ、つまりファサードの図版の縦と横がそれぞれ独立して組立てられる訳ではなく、両者は密接な関連を持っている。次にそれら誤差の調整、補正のためのファサード全体の縦と横の関係の仕組みについて考察してみる。

このファサードの幅はセルリオの記述に従うと24分割されるが、今みてきたように、図式により正確に分割され、図版においてもその正確さは確認される。ファサードの第1層の足元から第3層の軒の上端までの高さは、図版上第1層の高さ(=第2層)を11柱径として

$$11+11+11\times 3/4=121/4$$

となる。この時横と縦の比は $24:121/4=24:30.25$ であり、これはセルリオが挙げている6個の長方形4:5, 3:4, $1:\sqrt{2}$, 2:3, 3:5, 1:2の比の中では、4:5に最も近い値である。ここで試みに長方形4:5をこのファサードの枠として仮定し、長方形において「ポルタ確定法」を描いてみると、この長方形の下から2/3の高さとなる線(高さ20)は、第2層の柱の柱頭の上端の線にほぼ重なる。

他方セルリオの記述に従って第2層の柱頭の上端までの高さを計算すると柱径1として

$$11+3/2+4/5(11-3/2)=201/10=20.1$$

ほぼ20となる。つまり図式による位置は計算された高さとはほぼ一致し、このことからこのファサードの第1~3層の矩形は幅は24、高さは30とすることができると確認できる。つまり第1書で挙げた4:5の長方形をその枠として採用していることが解る。このことは幅を24分割することを前提とし、各階の高さの比を1:1:3/4にすることの二つの操作の組合せにより調整され、成されていると考えられる。同様に中央の間のアーチを支えるアーキトレヴの高さは、「第2層の他の窓と同じ高さである」と書かれていることからその高さを計算するとパラペット(3/2)、窓の開口高さ(3/2×5/2)、窓枠幅(3/2×1/6)を加えて

$$3/2+3/2\times 5/2+3/2\times 1/6=22/4=11/2$$

であるので、この高さは図式的には先に仮定した第1層と、第2層の高さを確定した正方形の1/2の高さ11柱径を2分割することで求められる。このことから図版そのものから測り取った数値を考慮に入れることにより、セルリオの記述に従って計算上求めた高さは作図可能であり、図式的に確定されると理解される。そして導入されたファサードの枠としての長方形における「マトリクス図」による線、交点も、幾つかのデザイン上の位置を確定していることも確認できる。

逆にこの計算に基づく結果と、図式により確定されたことのズレの調整、均しは、「ポルタの確定法」から導き出された正方形における「マトリクス図」により、ファサードを24分割し、柱径を決めることにより横幅関係の割り付けを行う前提に立ち、高さ関係において、彼自身立てた「各階の高さ関係は1/4ずつ遞減する」原則から離れ、階高の比を1:1:3/4とすることにより行われていると理解される。つまりセルリオがオーダーの規範に従おうとして挙げる数値、また全体的な数値の整合性のために導入する数値は、若干の調整が行われる。そして彼のデザインにおける構成要素の位置の決定は、以上見てきたように図式的に確定可能である。このファサードの図版はそうにして確定され、描かれたと考えられる。そしてその時「マトリクス図」は「分割のための図式」以上の役割を果たしていると言える。

(2) ドリス式パラッツォ(その2)、図版 XXXVIr

このパラッツォ(図-3)は同じくドリス式の章において図-1に続く作品である。第1層がルスティカ仕上げであること、第2、3層にセルリアーナが重ねて置かれていること、窓の配列の仕方など、見かけ上前例とのあいだに共通点がある。前例と同じように、ヴェネツィアの運河に面して建てられるように想定されており、建

図-3

1537年初版建築書第4書マイクロフィルム版より、補助線は筆者記入

物の足元に水の流れがリアルに描かれ、左には繋留された船も描かれている。このファサードでは中央のセルリアーナのある部屋が、その両側の部屋より張り出しているが、それは2層の部分的な平面図により図示され、またこの立面図に付された影によっても表現されている。セルリオの記述によれば、パラッツォの張り出したバルコニーはヴェネツィアでは「パーゴラ (pergola)」と呼ばれ慣わされ、当時ヴェネツィア人に好まれ運河に面して設けられた。それらは運河の水の眺めと、涼しさを享受するためであり、殆ど家がバルコニーを設けるのは、しばしば行われた運河での凱行列や祝祭を見物する楽しみのためでもあったと言う²⁴⁾。ヴェネツィアでは運河がメインストリートであることはよく知られているが、各々の住宅はそれに面してファサードを持ち、そこから直接出入りできる正面玄関が設けられている。このファサードでは、それらの特徴を持つヴェネツィア特有の「三分割構成」が強調され、ファサードに表現されていると言えよう。柱は第2層のセルリアーナの部分にドリス式が、第3層の中央部と、両側の部屋の窓にイオニア式が縦枠としてあるが、全体として柱の印象は強くはなく、セルリオの説明にも柱径のための分割はない。ここでファサードの構成について見てみよう。

図版から明らかに看取できる事柄に加え、彼の解説によると、このファサードの主要な割り付けは次のとおりである²⁵⁾。

- (1) ファサードの壁面内部で3部屋の幅の比は、3.5 : 3 : 3.5である。
- (2) 第2層の高さは前例と同じ理由で第1層に等しく²⁶⁾寄り掛かれるのに都合良い高さにパラベットと呼ばれる台を作り、残りを5部分に分割し、その一つをアーキトレヴ、フリーズ、コーニスに充てる。
- (3) 中央部の開口の幅は両脇の空き幅の倍であるが、その高さは二重正方形である。アーチの支えとして柱の上に置かれたアーキトレヴは、同じ階にある他の窓のレベルに等しい。
- (4) 第3層の高さは第2層の1/4減少させ、イオニア式柱を置く。

このファサードにおいてセルリオは、前例のように全体幅を何分割かして柱径を決め、その柱径による割り付けを行っていない。幅の割り付けについては単に三つに区分された部屋の内法幅の比、3.5 : 3 : 3.5を書いているだけであり、その比も柱径が単位ではない。これらの三部屋とは、第2層の平面図で図示されるように、運河に面したセルリアーナを持つロτζィアのある中央部と、その左右の部屋のことを指しているが、部屋の幅の比は平面図によって、正面の壁の内側で図示されているものの、ファサードにおいて表われない。ここでは幅についての割り付けに関する数的関係は、限られた範囲でしか

示されない。では書かれていないファサードの割り付けは、どのように読み取ることができるだろうか。前例においてセルリオの図版において説明がなく、数値が与えられないときに図式的に確定されることがある場合を確認したが、セルリオも書いているように²⁷⁾、説明されない長さ関係を図版より直接に寸法の比例関係として当たってみよう。

このファサードの全体を図版から直接その長さを測り取ると、その縦と横の数値の比はほぼ3 : 4であると思われる。それはファサードの幅を一辺とする正方形をファサードの下端に合わせて書き、セルリオが幾何学に関する第1書において提示したように²⁸⁾、正方形を3分割しその一つを加えることにより3 : 4の長方形を描くと、上辺は2本の煙突の上端に一致することからも確認できる(その時の分割において、「ポルタの確定法」は非常に有効である)。図-3においては、ファサードの図版に重ねて辺比3 : 4の長方形を描いているが、この長方形において「ポルタの確定法」を用いる。上辺の midpoint と、底辺両端の各頂点とをつなぐ斜線と、長方形の対角線との2つの交点は、このファサード全体幅を3分割する。そしてこれらの点を通る2本の縦線は、ファサード中央の張り出した部分の幅と一致しており、この作図により中央の張り出した部分が全体幅の1/3として確定されていることが解る。同時にそれらの交点は全体の高さの下端からの2/3の点でもあり、それらは第2層の高さを確定する点である。実際この2点を通る水平な線は第2層のコーニスの上端線である。そして3分割する縦線と、長方形の対角線の交点は4つあるが、下の2交点は第1層の高さを確定している。つまりこの図式により、第1層の高さ = 第2層の高さ = 全体の高さの1/3が、殆ど自動的に確定されていることが解る。また長方形の対角線の交点はこのファサードの中心となる点でもあり、図版上の中心点は第2層におけるセルリアーナのアーチの半円の中心点を押さえる。それは同時に上述(3)のセルリオの説明にあるようにアーチを支えるアーキトレヴの高さをも確定する。

また第2, 3層の中央の張り出した部分で「ポルタの確定法」の図式を描くと、この幅の1/3は第2, 3層のセルリアーナのアーチ幅と、それに等しい第1層の出入り口の幅となる。図-3においては図示していないが、同様の「図式」は両脇の部屋の窓と窓との間の壁の幅を、つまり窓の位置を確定する。同様に最初に描かれる元の正方形(一辺の長さはファサードの横幅)の対角線の交点は、第2層において「寄り掛かれるのに都合良い高さ」としてしか指定されていなかったパラベットの高さを確定する点となり、つまりパラベットは、下からの高さがファサード全体幅の1/2であることが計算されるが、説明されない位置が図式的に決められることも確認でき

る。

以上観てきたこれらファサードの図版と、そこに重ねあわせて描かれた「図式」との密接した種々の関連性を考えると、このファサードにおいては3:4の長方形が全体枠となり、そこで「マトリクス図」が用いられ、ファサードの基本的構成である各層の高さ、張り出した中央の部屋の壁の位置などが確定されていることが理解される。またその長方形を作るための正方形もファサード構成のために、同時的に用いられていると思われる。ここでは柱径に基づく割り付けがないので、オーダーの規則による数的制約も殆どないと言える。このファサードについては、セルリオの割り付けに関する記述が少なく、数的関係もあり述べられていないので、前例のように数値計算により確認できる点は少ないが、オーダーの規則に従って描かれるものと、図式的に確定されるものととの間のズレは、前例において見られたように多くはないだろう。それだけになお上述の、単純な辺比の長方形における「ポルタの確定法」「マトリクス図」の図式が、このファサード構成の割り付けにおいて支配的であると言える。おそらくオーダー理論による割り付けとのあいだに、部分的なズレを生みながらもこのファサードは、以上観たように、主として図式的操作により確定され、描かれたと考えられる。

結 論

ルネサンスにおいて建築書を刊行すること、そのこと自体が多額の費用を要し、国王、領主など庇護者の援助の下で行われる中、建築家は競って彼等の命運を賭け建築書を書き、デザイン、理論を世に問うたと考えられるが、幸いにして好評を博し、よく売れたと言われる²⁹⁾セルリオの建築書第4書におけるパラッツォのファサードも、ヴェネツィアの伝統に根差しながらも、新時代に対応した彼の新しいデザインの試みであったと言えるだろう。それらの中で、以上見てきたこれらセルリアーナを持つ2例のファサードは、その構成法において次のような特徴をもつと考えられる。

- 1) ファサードの全体幅の分割において「ポルタの確定法」と、それから導き出された「マトリクス図」が直接的に用いられる。同時に、これらの図式により柱径の幅、柱の位置など主として横幅の関係が確定される。それは例1のように全体の幅を24分割して柱径を決める場合に典型的な方法となる。
- 2) 「マトリクス図」は正方形が基本となっているが、例2においては、ファサードの全体枠として長方形が設定され、そこで「マトリクス図」を用いることにより高さ関係の位置を確定する。即ち「ポルタの確定法」は長方形においても適用される。またセルリオが書いているように各層の高さは1/4ずつ逓減されるが、こ

の場合「マトリクス図」により4分割が行われたと考えるのが自然である。

- 3) ファサードの構成において、セルリオ独自の「マトリクス図」によって確定されることと、一般的理論としてのオーダーにより決められることとの関係の調整を行うことにより、構成全体の整合性が保たれている。最後に、前稿において「ポルタの確定法」は、ポルタが意味する総体としての「門」のデザインの基本枠を与える方法であることを示し、またポルタを確定する方法が、そのポルタを持つファサード全体の枠組みそのものを規定しているのではないかと予備したが、本稿ではパラッツォのファサード構成における「ポルタの確定法」の役割の一端を示し得たかと思う。

注

- 1) 森田慶一、「西洋建築入門」、東海大学出版局、昭和46年、139頁。
- 2) ミケロッツォ設計により1444年に着工された。
- 3) A. Palladio "I Quattro Libri Dell' Architettura", Venezia, 1570.
桐敷真次郎編著「パラーディオ『建築四書』注解」中央公論美術出版、昭和61年。
- 4) "Il sesto libro delle habitazioni di tutti gradi degli huomini" セルリオ自身、第4書の始めに「著者から読者へ」の中で「第6書では、最下層の言わば小屋に始まり、都市あるいは田舎における最も装飾された君主の邸宅に至るまでの、あらゆる階層の住宅について語るだろう」と予告した本であるが、これには2種の手稿が存在する。
- 5) 拙稿、「セルリオの建築書第1書における『ポルタの確定法』について」日本建築学会計画系論文報告集、No. 407、1990年、1月。
- 6) Dizionario Universale dell' Arte 英語版, The Dictionary of World Art, Vol. XI, McGrawhill, Pub. London, 1966, Proportionの項参照。
- 7) 最近の研究では、1987年のCentro Internazionale di Studi di Architettura ANDREA PALLADIOにおけるゼミナールでの、SEBASTIANO SERLIO 特集 "Sebastiano Serlio", Electa, Milano, 1989においても見られない。
- 8) 第4書 XXXIIIr。
- 9) ibid., op. cit. XXXIIv. 第4書の中で、本稿で取り上げていないパラッツォについて少し言及すると、7章イオニア式におけるファサードは、幅が24柱径の構成を持っているので、ここで論じる例1に共通する割り付けの仕方である。8章コリント式におけるファサードは、幅が30分割されるので、「ポルタの確定法」が直接的に適用されない割り付け法あり、部分的適用も考えられるが、これらのファサードの詳細については別稿に譲る。
- 10) 「ドリス式パラッツォ」としたのは、ドリス式オーダーを扱った章に含まれているために、ここで仮に名付けたものである。他のイオニア式、コリント式のオーダーの章に含まれる作品例と同様に、特に各オーダー名を冠したパラッツォがある訳ではなく、セルリオ自身「~式パラッツォ」と書いている訳でもない。「ドリス式パラッツォ」

- については2例あるので「その1」,「その2」とした。
- 11) “Jacopo Barozzi Il VIGNOLA VITA E OPERE”, Arti Graphiche Tamari, Bologna, 1974, pp.48-49.
ボローニャにおけるパラッツォ・ボッキのことであるが、実際に建てられたものは計画案とかなり異なっている。
 - 12) ヴェネツィアにおける「セルリアーナ」を持つファサードの流行は、このことをよく物語っている。陣内秀信,「ヴェネツィア〔都市のコンテクストを読む〕」,SD選書200,鹿島出版会,昭和61,85~86頁。
 - 13) 陣内秀信, *ibid.*, op. cit. 83頁。
 - 14) 第4書 XXXIIIv。
 - 15) 冒頭の柱径の割り出しにおいて原文は「14分割」と書いてあり、他の版においてもこの数値が踏襲されているが、明らかに「24」である。*ibid.*, op. cit. XXXIVv。
 - 16) 正方形に基づく窓、その他の開口部の形態となる長方形の表現の仕方には、二重正方形(1:2), 正方形と半分(2:3), 正方形とその2/3(3:5), スキアンチョ(この単語自体は斜線を意味するが、 $1:\sqrt{2}$ のことを意味していると思われる)などがある。
 - 17) ルスティカ仕上げの第1層のことを示していると考えられる。
 - 18) podio, 台, 基壇のことで、柱の場合柱台、窓の下では窓口、ロジgiaのところでは手摺りに該当するが、いずれにしても高さは等しく、この場合「柱台」と訳した。
 - 19) 「対応した割合によってである」と書いているが、各部材は高さについてはほぼ1/4減減されている。しかし柱径については、同じように減減されてはいない。例えば第3層においては、柱間を柱径の整数倍と考えると柱径を1として、中央の柱間はほぼ12, その他の柱間は6と思われるが、その場合理論上柱径は1/2の減減となり、第3層での「柱オーダー」は「規則」に合わなくなり、ファサード構成上の何らかの調整がなされたと考えられるが、このことは他のパラッツォにおいても起こり得る問題でもあり、今後の課題としたい。
 - 20) 拙稿, *ibid.*, op. cit. 参照。
 - 21) セルリオの建築書においては、説明していない事柄について「その他の寸法については、コンパスにより拾えるだろう」と言うような表現がしばしばある。
 - 22) 第4書 VIr。
 - 23) セルリオが第4書を出版したのは1537年、彼が62才の晩年のことであり、当然のことながらそれ以前に出版された、または手稿による建築書を識っていたと思われる。
 - 24) 第4書 XXXIIIv。
 - 25) *ibid.*, XXXIIIv。
 - 26) *ibid.*, XXXIIIv。
 - 27) 注21参照。
 - 28) 第1書 p.15。
 - 29) 横山 正,「ルネサンス建築書出版事情」,建築史学,第5号,113頁,1985年9月,建築史学会。
- (1990年1月10日原稿受理,1990年3月7日採用決定)